

住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1669号 2003年01月27日(月)

《 growing uncertainty 》

今週のレポートのポイントは以下の通りです。

1. アメリカの対イラク戦争を巡る市場の不安感が高まっている。ニューヨークの株は先週一週間を通じて大きく下げて、年初の上げ分を消して昨年末の水準を下回った。為替も対ユーロで39ヶ月ぶりの安値になるなどドルの下落が目立ってきた。対円でもドルは下落傾向
2. ブッシュは今週の一般教書演説で、この市場の不安感を勘案して対イラク戦争の正当性を改めて主張し、市場の不安感と取り組む演説をしなければならない。しかし、反戦、厭戦、開戦延期ムードの高まりは世界の他の諸国のみならずアメリカでも顕著で、「単独でも」というブッシュ政権の意志は世界の中で悪しき突出を余儀なくされ、それがまた「アメリカの孤立」に対する市場の不安感を誘っている
3. ブッシュの選択肢は狭まりつつある。開戦時期を明確に先延ばしするのが一つだが、それは先週説明したように彼の再選シナリオにリスクとなる。別の方法は、理由を付けてフランス、ドイツ、ロシアを隊列からはずしたままで対イラク戦を開始することだ。短期に勝てば、市場の不安感の一部は収まる。しかし、この路線を選択できるかは不明だ
4. 市場は国連査察委員会の27日の報告、それを受けたブッシュの28日の一般教書演説に大きな関心を集めるだろう。可能性は少ないが、展開によっては対イラク戦争が比較的早期に開始される可能性がある。その開始のされ方、その時のアメリカと他国との関係、そして対イラク戦争後のアメリカ経済の行方に対する見方で、市場の展開は違ってくる。しかし、不安感が強いときに株が大きく持続的に反発するのは難しいし、ドルにも下方圧力が掛かり続けよう
5. イラクを巡る欧米の対立の結果的勝者は、案外日本を含むアジアかもしれない。ヨーロッパは日本円より急ピッチで進むユーロ高に今後悩まされることになる。対して日本の円は対ドルでは高いが、対ユーロでは安くなっていて、通貨の動きから受ける打撃はある程度中和されている。また、アジアは比較的中東での争い、大西洋を挟む言い争いから遠い。湾岸戦争を例で見ると、原油価格が上がっても一時的で、直ぐ下がる可能性が高い。とすると、内部に強い成長要因を抱えるだけに、ア

アメリカの対イラク戦争における予想外の勝者はアジア経済になる可能性がある

ブッシュ大統領は今頃、今週火曜日に行う一般教書演説でどう対イラク戦争を正当化し、市場に漂う不安感を拭うかを真剣に検討しているに違いない。先週このレポートで指摘したように、時間の経過とともに対イラク戦争、それを巡る先進国間の対立意識の高まりは市場の不安感を高め、ニューヨークの株価はほぼ一週間を通じて大幅に下落。特に金曜日の下げはダウで3%近くに達した。ダウ構成銘柄30がすべて下げるという全面安。引値(8131ドル01セント)は、再び8000ドル割れがいつあってもおかしくない水準である。

ここまでの下げが急だっただけに、今週の市場が一時的に反発することは十分に考えられる。27日の対イラク国連査察委員会の報告やブッシュの一般教書演説などがきっかけになりうる。また今週は指標も多く発表され、市場の視点が変わる可能性もある。しかし、ニューヨークの株価が持続的な反発基調になるには、対イラクの問題でなんらかの見通しが立たないといけませんが、その見通しは弱い。

《 Multilateralism cannot become an excuse for inaction 》

強まっているのは、アメリカによる先端が比較的早期に開く可能性である。今まで慎重派と言われていたパウエル国務長官は、このところ一貫してイラクに対して強い姿勢に出ている。ダボスで開かれている世界経済フォーラムの会合(ダボス会議)で、

「"Multilateralism cannot become an excuse for inaction," Powell told the World Economic Forum in the Swiss town of Davos.

"We are in no great rush to judgment today or tomorrow, but it is clear that time is running out."」

と述べたとニューヨーク・タイムズは伝えている。「同盟国が支援しなくても、一カ国でもやる。時間切れが近づきつつある」という意味合いである。まるでラムズフェルド国防長官の発言のように聞こえる。

先端の開始が近いことを臭わしているのは、パウエル長官だけではない。例えばホワイトハウスのフライシャー報道官は、

「Fleischer added that Saddam "is making the end of the line come even closer by his unacceptable behavior."」

と「イラクの行動は受容しがたい」として、「(フセインは自ら)時間切れを接近させている」と述べている。ただしアメリカは軍隊の展開に関しては、依然として「(開戦準備に)

あと一ヶ月くらいが必要」との見方をしているようで、その程度の「査察延長」は認めるだろう。

アメリカがなぜそれ以上対イラク戦争の開始を遅らせることができないかは、先週のレポートに書いた通りである。ブッシュにとって、先端を開くのを遅らせることは最悪のシナリオになる。その間にニューヨークの株価は落ち、反対は増え、戦費は嵩み、なによりも来年のブッシュ大統領の再選シナリオは悪化する。

今週再びアメリカで公表された同大統領に対する支持率は55%と一時の80%台から大幅に低下、一方「不支持率」は53%と過去最高になった。対イラク戦争の陰は、経済ばかりでなく大統領の支持に対しても大きな打撃になっている。

しかし、仮にアメリカが「単独でも」というパウエル国務長官の発言通りの行動をした場合に、ニューヨークの株価やドルがどう反応するだろうか。戦端が開かれて、戦争が早期に片づけば、市場の不安感は消える。株価もドルもその場合にはそれまでのプレッシャーから解放されて反発する可能性が高い。

ただし、アメリカが「単独」で行った、世界の他の諸国が支持しなかった、という事実は残る。言ってみれば、アメリカの覇権主義が世界を差配しているという印象が確立するわけである。気に入らない政府があったなら、場合によってはアメリカの意志で転覆できるという新しいドクトリンの完成である。その結果は、世界中の反権力闘争のターゲットにアメリカが一段と突出することになる。強いことを証明したからと言って、資本が集まる国になれるかは分からない。資本が集まらなければ、ドルも強くないし、株価も上がらない。

イラクを巡る欧米の対立（フランスとドイツに対するラムズフェルド国防長官の“古いヨーロッパ”発言などで顕在化）の結果的勝者は、案外日本を含むアジアかもしれない。勝者とは「資本の受け手」「結果的メリットの受け手」という意味である。

今はアメリカを忌避した資本はヨーロッパに向かっている。であるが故に、ユーロは対ドルで大幅に上昇している。しかしヨーロッパは、日本円より急ピッチで進むユーロ高に今後悩まされることになる。地域全体としてみても、欧州はアジアよりも成長力が弱い。

対して日本の円は対ドルでは高いが、対ユーロでは安くなっていて、通貨の動きから受ける打撃はある程度中和されている。また、アジアは比較的中東での争い、大西洋を挟む言い争いから遠い。中国という年率8%を上回る成長率を誇る成長センターも抱えている。

アジアが弱いのはエネルギーだが、湾岸戦争を例で見ると、原油価格が上がっても一時的で、直ぐ下がる可能性が高い。1990年から91年にかけての湾岸危機（イラクのクウェート侵攻）から湾岸戦争（91年1月17日～2月28日）にかけて原油相場の展開を振り返ってみると、短期間でのバレル40ドルへの急騰期と、その直後から始まった急落期で収まっている。その乱高下期を除けば、世界の原油相場は20ドル前後で安定している。

今回も OPEC が「石油価格安定政策」を採用していることを勘案すると、原油相場は開戦と同時に上がっても、その後はバレル 30 ドル前後に安定ゾーンを見つけた可能性が強い。そうなれば、内部に強い成長要因を抱えるだけに、アメリカの対イラク戦争における予想外の勝者はアジア経済になる可能性がある。

今週の主な予定は以下の通り。

1月27日(月)	12月貿易収支 日銀支店長会議 米12月中古住宅販売 イラク問題、国連査察委員会が報告書を安保理に提出
1月28日(火)	12月商業販売 独1月Ifo景況感指数 米FOMC(～29日) 米一般教書演説 スノー財務長官指名承認公聴会 米12月耐久財受注 米12月新築住宅販売 米1月消費者信頼感指数
1月29日(水)	12月鉱工業生産
1月30日(木)	米10-12月GDP
1月31日(金)	12月完全失業率、有効求人倍率 12月家計調査 12月建築着工、住宅着工、建設工事受注 1月東京都区部、12月全国消費者物価 米12月個人所得、個人支出 米1月ミシガン大学消費者センチメント指数改定値 米1月シカゴ購買部協会景気指数

《 have a nice week 》

寒い週末でした。まだこの寒さは続きそうで、今朝も寒い。インフルエンザも猛威をふるっているようで、皆様お気を付け下さい。

それにしても、朝青龍は今場所強かったですね。貴乃花が引退して国技館がすきずきになってしまった後だけに、彼の優勝は一つの明るい材料でしょう。十両も幕内も優勝力士がモンゴル出身でも、面白い相撲なら良いとも思う。

しかし、「時間」になって彼が塩をつかむ前のあの鷲が羽を揺らすような手の振りは絵になりますね。以前テレビで見たことがあるのですが、モンゴル相撲の手の使い方を見てい

たら良く似ていた。あれは売りになるのではないのでしょうか。

日曜日は番組の関係で貴乃花を間近に見ていたのですが、インタビューの内容（笑顔で饒舌で素晴らしいものでした）以外で一つだけ非常に感心したことがあります。テレビには映らなかったのが番組の中で言ったのですが、一時間近いインタビュー（背広姿での初めてのナマ）を終えてスタジオから出ていくときです。私はスタジオ内にいて出口近くの椅子席で他のスタッフと一緒に座って見ていた。

親方は終わって出口に向かって歩いて来た。そのまま出ていくのかなと思ったら、出口にもうちょっとというところに来たら、そこで止まり、180度振り返ってスタジオのセットに向かって一礼した。あたかもそこに土俵があるかのように。

私が記憶する限り、こんなゲストは初めてです。その後に8人の親方の付き人がぞろぞろ出ていったのですが、彼らは無愛想で、振り返って礼をすることもなかった。まあ付き人はスタジオでは花を親方に渡すだけですから、貴乃花のように「インタビューという土俵」がそこにあったという印象はなかったかもしれないのですが。しかし彼のこの礼節は素晴らしい、と思ったのです。

それでは皆様には、良い一週間をお過ごし下さい。

《当「ニュース」は、住信基礎研究所主席研究員の伊藤（E-mail ycaster@gol.com）が作成したものです。許可なき複製、転送、引用はご遠慮下さい。また内容は表記日時に作成された当面の分析・見通しで一つの見方を示したものであり、売買を推奨するものではありません。最終的な判断は、御自身で下されますようお願い申し上げます》